
馬鹿と書いて王子と読む

草草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿と書いて王子と読む

【Nコード】

N4851Y

【作者名】

草草

【あらすじ】

とある小国の馬鹿王子のアホな日常と思いきやその生活がまるつと変わりそうな衝撃的な事実が発覚したよという話。ノリと勢いだけ。ただの馬鹿に鉄拳制裁と罵倒を浴びせるだけの、ばいおれんすなお話です。あしからず。

暗い部屋の中で一人ほくそ笑んでいる人物がいる。

まだ少年と言っているいいあどけなさを残した顔は、近い将来この少年が誰もが認めるような容姿になることを窺わせるには十分だった。その笑みの種類が例え”ほくそ笑む”であつても、絵になるような状態である。

そのとき。どん！！という衝撃が部屋を襲った。

少年はその音にびくうつと過剰に反応し、音源であるドアを振り向いてすごい勢いでドアと距離を置いた。そりやもう、一目散に。暗いから何回か物に躓きながら。

いや、ドアと呼ぶのに相応しいかは分からなかった。

ありったけの家具で嚴重にふさがれたドアはもはやドアとしての機能を失っており、少年はもうそのドアを使う気など無かった。むしろ、使いたくなくてそうした。開かないでお願い、というのが心中である。

「おーうーじーいー？」

そのドアが。みしり、みしりと音を立てて少しずつ、少しずつ開かれようとしている。

そしてドアの向こうから聞こえてくるドスの効いた声。その声に冷や汗がたらたらと流れた。

いやいやいやあり得ないだろ。いくらなんでもこのドアは開きっこないだろ。落ち着け自分落ち着け自分。あゝもうこれってどんな

ホラーだよ！？

必死に少年が自分を奮い立たせる間も、ドアが嫌な音を立てる。

「王子？何かドアが重いんですけど？開けてくださいよ王子。楽しい楽しいお勉強の時間ですよ？」

「きつとドアがリオのこと嫌いなんだよ。いやいや実に残念だね。ほらこの通り僕部屋から出られないし？これはもう、神様が願い叶えてくれたから”自宅警備員”になるしかないよね。という訳で諦めたほうがいいよりオ」

少年が勇気を振り絞ってドアに向かって言う。

ドアは何回か音を立てた後、沈黙した。どうやらドア向こうの人も今度ばかりは諦めたようだ。

それを確認した後、少年の体は歓喜で震えた。

「ふふふふ。やったぞ！遂にこの日が来たんだ！！あの人間とは思えない暴力女から僕は逃げ切ったんだ！！ふはははざまーみやがれ愚民ども！！僕は遂に念願の”自宅警備員”になり2次元のおんにやの子たちとうっふふきゃっきゃ生活に明け暮れてやるんだ！！あーはははははははは！！！！」

その雄叫びは、どごおおおお！！！！という轟音によってかき消された。

ドアは木っ端微塵に吹っ飛び、ドアをドアたらしめなかった家具たちはもはや原型をとどめていない。そして明るい廊下の光が散々たる部屋の様子を照らしていた。

そんな部屋の入り口に仁王立ちをする人物が一人。

逆光によって少年からはその顔の表情は分からなかった。しかし想像が安易に出来てしまって、少年は冷や汗どころか傍目にも分かるようにぶるぶると体を震わせる。

その人物から、先程より一段階アップした地獄から響くような声が発せられる。

「だ〜れ〜が〜”暴力女”だってえ?” 自宅警備員”がなんだってえ?”」

「い、いえ、そ、それは……………」

「勉強の時間だっつつってんだろ? が何部屋にひきこもって”うつふふきやつきゃきゃ”だこの万年頭お花畑野郎人の話聞いてんのかこのどアホ今日こそ世界に不要なそのどたまかち割ってやんからな覚悟しろやあああああ
!!!!!!」

逃げようとしたところ首根っこを掴まれ。がくがくがくゆさゆさゆさと揺らされ。容赦ない拳が降ってきて。蹴られ、殴られ、家具が散乱している中に放り投げられ。

鬼!!! 鬼がいるうつうつ!!!

少年は心の中で絶叫した。

ソレイユ王国は大陸の東南にある小さな国だ。

国、王家と言えば聞こえはいいが、如何せん各単語の前には”弱小”の二文字が煌々と輝いている。

面積、わずか160平方キロメートル。海と山に囲まれて天然の要塞なんて言われるが、どこが？という感じである。

海と言っても崖であり、海に出ることはとてもじゃないが望めない。海産物？何それおいしいの状態である。険しい山のお陰で他国との物流も困難。諸々の自給率はほぼ100パーセントだ。さらに面積の半分以上をお山様にもってかれていた。

「敵に周り囲まれたら簡単に降伏するよね。自分から袋のネズミ状態になってるよね」なんていう指摘は本当に笑えない。まあ、そこを笑うのがソレイユ国民だが。良いのか悪いのかは別にして。

人口、多めに見積もって3万人。貴族も一応いるが、一般市民とほぼ変わらない生活を営んでいる。身分制度などあっても無いのに等しい。それでもあるのは、「あつたほうが格好いいから」という何とも言えない理由によって。どこまでマイペースなんだこの国。

それでも王家は割とすごかったりする。先々々々代くらいは他の列強を相手にブイブイ言わせていたというし、何かすごい血も引いているそうだ。どうすごいのかは知らないが。

まあ、要はそれだけ。

最近の王様は皆”賢王”と呼ぶに相応しく、王家らしい威厳もあるが野心は皆無。ひたすら民思いという素晴らしい方々ばかりであり、世界がどうこう言う人達ではなかった。民にとっては自慢の王なのだが、消極的なその姿勢は他国にバカにされがちである。

国の小ささや魅力の少なさ、王家の存在感の薄さによって、世界を震撼させた先の大戦にも参戦していない。理由は完璧に他国に忘れ去られていたことにある。

満身創痍な他の国には、その後ねちねちと暫く嫌味を言われたらしい。王様は知らぬ存ぜぬでしらばつくれたという。ちなみに当代の王様だ。王様すげー。

その王様の子供であり第二王子であるのが、今リオの目の前にいる人物キミト・クリル・フォルセウスだ。例え「暴力反対暴力反対」：僕は君のサウンドバックではなく高貴な王家の人間でありこんな扱いは万死に値する……しくしくしく首痛い……」なんて首をさすりながら呟いていようが、リオにばこばこにされて包帯にぐるぐる巻かれていようが、残念なことに王子だ。

ソレイユ国民の特徴である黒髪黒目。その色に一番映えるような顔をその首にはのっけており、王家として外見を見ればぐうの音も出ない。あくまで見た目だけは。

問題は中身。

一度口を開けば「僕をお嬢さんにしてください！」と手当たり次第女性に向かつて求婚。この国に王子に求婚されていない女性はほとんどいないだろう。

勉強はサボる、剣術はサボる、メイドの着替えを隠れ見る、セクハラはする、どこから採ってきたのか分からない虫を部屋に放す、おやつの時間だけこっそり顔を出す、等々。

最近「僕は自宅警備員という素晴らしい職に就く！」なんて宣言して部屋に閉じこもり、先程の乱闘をリオと繰り広げた。

何でここまでの馬鹿が出来上がったのかはこの国の七不思議の一つだ。

「キミト王子、いい加減にしてください。何が『自宅警備員になる！』ですか。十分警備員、というか衛兵はいますし、王子のそれは完璧に”ひきこもり”というやつです」

「何を言うかりオ！」ひきこもり”という単語がマイナスイメージしかないからこそ”自宅警備員”という単語だろう」

つまりお前はひきこもり宣言してた訳か。

すみません反省してますごめんなさい首だけは止めて。

先程から何だその私が暴力女みたいな言い方は。はあ、とリオは深い、深い溜め息をついた。

「……………あのですね。言いたくはなかったのですが、民が王子のことを何と言っているのかご存じないのですか？」

「だったら君こそどうなのさ。巷では貧乳萌えの奴らに人気があると聞いているがそれは本当か。どれどれ僕が貧乳の名に相応しいか確かめてみよう」

「黙りやがれこの年中発情期男！！そのぶらさがってるモン使い物にならないようにして欲しいか！？ああ！！！！？」

どん、と叩かれた机は内側にへこみ。

キミトが少し動かした右手はそのまま停止し。

……………がくがくがくがくぶるぶるぶるぶる

「……………り、リオさん、言葉遣い言葉遣い！」

「あら失礼。……いいですか。今までお心を痛めると言ってますでしたが、今市井の間では”馬鹿”と書いて”キミト王子”と読むそうですよ」

「フムフム。つまり”本気”と書いて”マジ”と読む原理と一緒にわけか。かつくいゝい、さすが僕ちん。何にもしていないのにもう二つ名が付くなんて、いやあゝ、僕ちんの人気さを窺わせますなゝ」

「そうですね格好いいですね素敵ですね。何でも、今では”馬鹿”は王子にしか使われない言葉だそうですよ。他に馬鹿と言える人がいても、王子の上を行く人がいないので”馬鹿”だけで王子のことを語ることが可能のようです。素晴らしいですね素敵ですね涙がでますね。つまり”馬鹿”は王子の為に存在している言葉なのですよ。『あの馬鹿は今日もさゝ』『あゝ、あの馬鹿ね』というように。せっかくだから私も使わせて頂こうと思います。ね、馬鹿？」

「あははははゝ。……………泣いていい？」

「ダメです。泣く前に少しは勉強して民に馬鹿と言わせないようにしてください！」

勉強なんてしてられるかー！
うつさいさつさとやれやー！！

「二人とも相も変わらず仲が良いねゝ」

今まさに、血の海となろうとしたところに。そう言って部屋に入ってきたのは見目麗しい青年だった。

御伽噺からそっくりそのまま出てきたような典型的な王子様。顔よし頭よし運動神経よしという、どこをどうとつても金太郎飴のように完璧な人物。それがソレイユ王国第一王子、フミト・デラ・フォルセウスその人だ。

唯一そこに欠点的なものがあるとすれば、その髪色。王家では本当に珍しいことに、黒色ではなく茶色をしている。噂によれば”先々々々々代の王妃様の叔父さんのそのまた叔父さん似”らしい。

そんな民の理想の王子様であるフミト王子と、代名詞が”馬鹿”であるキミト王子の人気は天と地。月とすっぽん。

…まあ、キミト王子も逆にその馬鹿さ加減で親しみが湧くというか、何というか。決して民にないがしろにされてはいない。馬鹿にはされているけれども。

そんな御方が第一王子なので、まあ、第二王子の素行もそこまで問題にはならない、のかなあ？温かく、温かく見守っている次第である。「いや、本当にあの馬鹿が第一じゃなくて良かったよね。もしそうだったら国の将来も不安だよな。うんうん。ホント助かった」というのがこの国の共通認識だ。

それでも。それでも王子なのだこいつは。

リオは王家に少なからず尊敬の念を持っている。他国が何と言おうが、この国の王家は素晴らしいのだ。

キミト王子にも王家の人間として、是非とも誇りを持てるような人になって欲しい。むしろ、なれ。汚点になるなよこの馬鹿。という思いで、誰もやらない王子の教育係兼世話係という名の貧乏籤をひいているのだ。毎日それはもう必死である。

「フミト様も何とか言ってください！」「お前は王家の恥でありこの

国に煌々と輝く汚点であり死んだほうがこの国の為と世界の為だ』
つてぐらい言わないとこの馬鹿分かりっこないんですよ！私は立場
上そこまで大それたことは言えませんが！！そんな心で常に思っ
てることを口に出して言えませんが！！」

「いやいやいや十分言ってるじゃん！？心の声だだ漏れじゃん！
？もーいい！！僕はきつと王家じゃないんだ病院で取り違えられた
んだ！僕の本当のパパとママはそれはそれは綺麗で僕にベタ惚れで
甘いんだ！待っててパパママ今本当の息子プリティ キミトが会い
に行くからね ！！！！」

「ほう？じゃあ行くか？パパママの所へ。今は丁度執務室にいるは
ずだよなあ？今の言葉お二人の前でもう一度言ってみつかあ？ああ
？」

嘘です言葉の綾ですいやー！行きたくないー！！！！
今日こそその腐った脳みそ再構成してこいやあああ！！

ぎゃーすかぎゃーすか

基本的にこの国の人はおおらかというか何というか。見慣れた光
景というか何というか。

取っ組み合いを今にも始めそうな二人を見ても動じず、本当に仲
が良いよね、とにこにこするフミトが大物な訳でもない。いや、大
物な訳でもあるか。

フミトは「そつだ言つことあったんだ」とぽんと手を打つ。

「あ、そうそう。その話題について実は話があるんだ」

「まじすか!?!」

「うわーんやつぱり僕は違う家の子なんだー!しくしくしく……ひゃっほーいこれで勉強・剣術からおさらば待つてろ薔薇色ヒモ生活ー!」

「今までこれでも一応王子だから泣く泣く己の良心を最大限にまで引き上げて最後までは自制していましたがそれも全て意味のないことでありこれからは今までの分まで牛乳に浸されたボロ雑巾のようにしてもいいってことですか!?!」

「………前言撤回!!おにーさま今は嘘でも偽りでも家族と言つて!!血い繋がってるって言つて!!じゃなきゃ確実に殺られつくえ」

「じゃーかましいわボケ!今までよくも好き勝手やってくれたな分かってるんだろ?うなああ!?!さあさあさあさあその耳かっぽじって死刑宣告でも聞けや!」

あうう、や、やめ、くび、くびしまっ!!

がくがくがくゆさゆさゆさ

そんな修羅場を意に介せずあはははと傍観しながら、フミトは世間話のように続ける。それはもう、日常会話のように。

「血、繋がってないんだよね。」

俺

ひいひいおおお助け、
がくがくがくゆさゆ、

ピタリと双方の動作が止まる。

息ぴったりだな〜とフミトは感心した。

「……………はいい？」

またもや息ぴったりにぐりんと首を回して二人揃ってフミトに注目する。

思考回路が正常に戻っていないリオに代わって、引きつった笑みを浮かべたキミトがおそろおそろ尋ねた。

「えっと、おにーさま。それはどういう」

「だから、俺が貰われっ子って話」

……。

「し、妾腹の出とかそっいう？」

「いやいや。正真正銘王家じゃないよ。城の前に捨てられてたから、拾って貰ったんだ」

……。

「……………冗談？」

「本気^{マジ}。その証拠にほら、髪の毛一人だけ茶色でしょ？」

それは先々々々代の王妃様の叔父さんのそのまた叔父さんの遺伝では？

いやいやいや。一片の信憑性もないじゃんそれ。よくみんなそんな噂信じるよね。

……………ですよねー！。

「という訳で、おめでとうキミト。お前は最初から第一王位継承者だ」

．．．．。

「「はあ

！？」」

（後書き）

息抜き作品です。

どこかでみたことあるような感じなのはご愛敬？…私がそれだけそれを好きってことですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4851y/>

馬鹿と書いて王子と読む

2011年11月17日19時07分発行